礼拝説教（2024 年 6 月 23 日）

説教者：中村信哉

イエスを証しするもの

ヨハネの福音書 5 章 31-40 節

はじめに

イエス様はある安息日に、三十八年も病気にかかっている人を癒され、神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされました。つまり自分は神の子である、自分は神と等しい存在であると言われたのです。そのイエス様の姿を見聞きしていたユダヤ人たちは、イエス様のことを、律法違反者、また神を冒涜する者と見て、イエス様を迫害し始め、殺そうとするようになったのです。

今日の聖書箇所のテーマは、イエス様は本当に神の子なのか、本当に神と等しい存在なのか、本当に**「神から遣わされた者」**なのかということです。そしてもしそうであるならば、その証拠は何なのかということです。イエス様は、今日の聖書箇所で、ユダヤ人たちに向かって、ご自分が「神から遣わされた者」であることを、弁明しようとしています。

1. イエスの証し

イエス様は、31 節でこう言われます。**「もしわたし自身について証しをするのがわたしだけなら、わたしの証言は真実ではありません」**。旧約聖書の律法によれば、何かを証言する時、一人の証言だけでは、それが真実とは認められません。二人または三人の証言によって、初めてそれが真実であると認められます（申命記 19：15）。ですからイエス様も、自分だけが「自分は神から遣わされた者である」といくら証言しても、決して真実にはならないと言っておられるのです。イエス様が確かに「神から遣わされた者」であるということが真実であると認められるためには、二人または三人の「証言」、イエス様以外の二人または三人の**「証し」**が必要になるのです。

そこでイエス様は、32 節でこう言われます。**「わたしについては、ほかにも証しをする方があおられます。そしてその方がわたしについて証しする証言が真実であることを、わたしは知っています」**。イエス様には、自分以外にも「この人は神から遣わされた者である」と証しし、証言してくれる方がいると言うのです。では、イエス様を証しし、証言してくれる方とは、どなたでしょうか。それは、神様ご自身です。37 節に、**「わたしを遣わされた父ご自身が、わたしについて証しをしてくださいました」**とある通りです。

神様は、イエス様こそ「神から遣わされた者である」「神の子である」「神と等しい存在である」と証ししてくださいます。神様こそ、イエス様にとっての最大の証人、証言者です。今日の聖書箇所で、神様は三つの方法で、ユダヤ人たちにイエス様のことを証ししていると書かれています。

2. ヨハネの証し

一つは、「バプテスマのヨハネ」を通してです。33-35 節を見てみましょう。**「あなたがたはヨハネのところに人を遣わしました。そして彼は真理について証ししました。わたしは人からの証しを受けませんが、あなたがたが救われるために、これらのことを言うのです。ヨハネは燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で大いに喜ぼうとしました」**。

神様は、バプテスマのヨハネをイエス様よりも少し前に遣わし、イエス様を証しさせました。ヨハネ 1：6-7 には、こうありました。**「神から遣わされた一人の人が現れた。その名はヨハネであった。この人は証しのために来た。光について証しするためであり、彼によってすべての人が信じるためであった」**。バプテスマのヨハネの使命は、イエス様を証しすることでした。

イエス様は、「人からの証しを受けません」と言われます。イエス様は本来、私たち人間の証しを必要とされないようです。しかし、私たち人間が救われるために、私たち人間の証しを用いられると言われるのです。神様は、人を救うために、人の証しを用いられるのです。

ユダヤ人たちは、バプテスマのヨハネを大いに喜びました。しかし、それは「しばらくの間」だけでした。彼らは、結局のところ、バプテスマのヨハネの証しを受け入れなかったのです。バプテスマのヨハネが、イエス様こそ「神から遣わされた者である」と証言した証しを受け入れなかったのです。

3. イエスのわざの証し

神様がイエス様を証しした二つ目の方法は、「イエス様のわざ」を通してです。それは、イエス様の奇跡と言ってもよいと思います。36 節を見てみましょう。**「しかし、わたしにはヨハネの証しよりもすぐれた証しがあります。わたしが成し遂げるようにと父が与えてくださったわざが、すなわち、わたしが行っているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わされたことを証ししているのです」**。イエス様は、数々の奇跡を行い、病人を癒したり、悪霊を追い出したりされました。ここには、それらのイエス様の奇跡の目的が書かれています。それは、「父がわたしを遣わされたことを証し」するためだったのです。つまり神様がイエス様を遣わした、ということの証拠として、「しるし」として、イエス様は奇跡を行われたのです。しかもそれらの奇跡は、「わたしが成し遂げるようにと父が与えてくださった」ものなのです。イエス様が行われた奇跡は、神様がイエス様に与えられたものなのです。そして神様がイエス様を遣わしているということの証拠として、しるしとして、その奇跡が与えられていたのです。

ユダヤ人たちは、イエス様の奇跡を見ました。三十八年も病気にかかっていた人が、癒やされた姿を見ました。しかしそれでも彼らは、イエス様を信じませんでした。むしろ、イエス様が安息日に病気を癒し、「床を取り上げて歩け」と言ったことを問題にしたり、神への冒涜者として見て、イエス様を迫害し始め、殺そうとまで思うようになったのです。

4. 聖書の証し

神様がイエス様を証しした三つ目の方法は、「聖書」を通してです。37-40 節を見てみ

ましょう。**「また、わたしを遣わされた父ご自身が、わたしについて証しをしてくださいました。あなたがたは、まだ一度もその御声を聞いたことも、御姿を見たこともありません。また、そのみことばを自分たちのうちにとどめてもいません。父が遣わされた者を信じないからです。あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証ししているものです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません」**。

ここでの「聖書」というのは、旧約聖書のことです。イエス様は、「その聖書は、わたしについて証ししているものです」とはっきり言っています。旧約聖書は、イエス様を証ししているものなのです。律法に書かれている動物のいけにえは、イエス様の十字架の贖いを表していますし、エジプトの奴隷時代からイスラエルの民が贖われた出来事は、罪の奴隷状態から私たちを贖うことを表しています。またイスラエルの王国は、イエス様を王とする神の国を表しています。その他、イエス様に関するメシア預言はいくつも書かれています。旧約聖書は、イエス様を証しする書物です。もちろん新約聖書もイエス様を証しする書物です。神様は、旧新約聖書を通して、イエス様こそ「神から遣わされた者」であることを証ししているのです。

ユダヤ人たちは、聖書の中に「永遠のいのち」があると思って、聖書を調べていました。この「調べる」という言葉は、新共同訳聖書では「研究する」とも訳されています。ユダヤ人たちは、聖書を熱心に研究しました。しかし「永遠のいのち」を見出すことができませんでした。また神様の「御声を聞いたことも、御姿を見たこともありませんでした」。また「そのみことばを自分たちのうちにとどめてもいません」でした。なぜでしょうか。それは、38節にあるように、イエス様を信じないからです。また40節にあるように、イエス様のもとに来ないからです。聖書は、イエス様を証しするために書かれたものです。聖書の中心テーマは、イエス様です。ですから、どんなに聖書を調べても、どんなに聖書を研究しても、イエス様を信じなかったら、聖書を本当の意味で理解することはできないのです。聖書の本当のメッセージを見出すことはできないのです。聖書は、イエス様を信じた時に初めて、本当の意味で「分かる」書物なのです。

ユダヤ人たちは、聖書の中に永遠のいのちがあると思っていました。しかし永遠のいのちは、聖書の中にあるのではなく、イエス様のうちにあるのです。ですから、いくら聖書を調べて、研究しても永遠のいのちを得ることはできませんでした。聖書の中に証しされているイエス様を信じた時に初めて、永遠のいのちを得ることができるのです。永遠のいのちは、「学問」によって得ることができるものではありません。「信仰」によって得られるものなのです。イエス様を信じて、イエス様と出会う時に与えられるものなのです。

ユダヤ人たちは、神様の「御声を聞いたことも、御姿を見たこともありませんでした」。どんなに律法を守っても、どんなに聖書を調べても、研究しても、神様の御声を聞くことも、御姿を見ることもできませんでした。イエス様はある時、弟子のピリポにこう言われました。**「主よ、私たちに父を見せてください。そうすれば満足します」**。するとイエス様は、ピリポにこう言われました。**「ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのです**

か。わたしを見た人は、父を見たのです」(ヨハネ 14:8-9)。イエス様は、「わたしを見た人は、父を見たのです」と言われました。イエス様を信じれば、神様の御声を聞くことも、神様の御姿も見ることができるのです。しかしユダヤ人たちは、イエス様を信じなかったので、神様の御声を聞くことも、神様の御姿も見ることもできなかったのです。

おわりに

イエス様もパウロも、**「二人または三人の証人の証言によって、すべてのことは立証されなければならない」(マタイ 18:16、IIコリント 13:1)**と言っています。神様は、様々な方法でイエス様が「神から遣わされた者である」「神の子である」「神と等しい者である」ということを、証しされました。バプテスマのヨハネの証しを通して、またイエス様に奇跡のわざを通して、さらに聖書のみことばを通して。これら三つの方法を通して、神様はイエス様を証しされ、イエス様こそ真実であると立証されました。それは、34 節にあるように、私たちが救われるためです。また 40 節にあるように、私たちが「永遠のいのち」を得るためです。

神様は、私たちがイエス様を信じるための十分な証拠、証しをすでに与えてくださっています。これら三つの方法は、今やすべて聖書に書かれています。バプテスマのヨハネの証しも、イエス様の奇跡も、すべて新約聖書に書かれています。旧約聖書も新約聖書も、イエス様を証しするために書かれた書物です。私たちが救われ、永遠のいのちを得るために書かれた書物です。

しかし聖書は、イエス様を信じなければ、本当の意味を理解することができません。聖書を理解できたら、イエス様のことが信じられるのではありません。そうではなく、イエス様を信じれば、聖書が理解できるのです。イギリスの古いことわざに、次のような言葉があるそうです。「不信仰は証拠の欠如から生じるよりも、むしろ信じようとする意志の欠如から生じる」。多くの人は、神様が本当にいるのなら証拠を見せてくれ、イエス様が神であることの証拠を見せてくれと言います。しかしいくら証拠がたくさんあっても、信じる心がなければ、いつまで経っても神様が本当に今も生きていることは分かりません。またいつまで経っても、イエス様こそ真の神であることは分かりません。証拠は、聖書で十分なのです。しかも聖書の全部を読まなくても、その中心的なメッセージを掴めば十分なのです。聖書の中心的なメッセージは、ヨハネ 3：16 に書かれていました。**「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」**。このメッセージを信じることさえできれば、誰でも今日救われ、永遠のいのちを得ることができるのです。

証拠や証しは大切です。それが真実であることを証明するには、複数の証拠や証しが必要です。しかし、神様は私たちが救われるために、永遠のいのちを得るために、すでに複数の証拠を通して、イエス様こそ「神から遣わされた者である」「神の子である」「神と等しい存在である」と証ししてくださっています。証拠はもう十分です。あとは、私たちがそれを信じるかどうかです。残されているのは、私たちの決断だけなのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは、私たちが救われること、永遠のいのちを得ることを願っておられます。そのために、あなたは複数の証し、しるしを私たちに与えて、それを旧新約聖書の中に記されました。あなたは、私たちがイエス様を信じるための十分な証しを、すでに与えてくださっています。あなたが私たちに求めていることは、イエス様を信じる決断です。私たちは、いつまでも証拠を求めて決断を遅らせます。信じることよりも理解することを求めます。しかし神のことばである聖書は、理解してから信じるものではなく、信じてからよく理解できるものです。どうか私たち一人ひとりが、神様の十分な証拠の前に、イエス様を信じる確かな決断をすることができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。